

7 主定理の証明の代数的部分

7.1 命題. \mathcal{F} を X 上の向きをついた p 次元 *foliation* とする。 $\phi(\vec{\mathcal{F}}) > 0$ となる X 上の C^∞ 級 p 次閉微分形式 ϕ が存在すれば、 X 上のある *Riemann* 計量が存在しその計量に関して ϕ は \mathcal{F} の *calibration* になる。

命題 7.1 の証明は補題 7.2 から補題 7.13 までの準備のあとで証明する。以下では E を n 次元実ベクトル空間とし、 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ を E 上の内積とする。

7.2 補題. V を E の部分ベクトル空間とし $\xi \in G(p, E)$ とする。このとき V の正規直交ベクトル f_1, \dots, f_r と V^\perp の正規直交ベクトル g_1, \dots, g_s と $0 < \theta_j < \pi/2$ ($j = 1, \dots, k$) が存在し (ただし $k \leq r, s \leq p, r + s - k = p$)

$$\xi = (\cos \theta_1 f_1 + \sin \theta_1 g_1) \wedge \cdots \wedge (\cos \theta_k f_k + \sin \theta_k g_k) \wedge f_{k+1} \wedge \cdots \wedge f_r \wedge g_{k+1} \wedge \cdots \wedge g_s$$

を満たす。

証明. $P : E \rightarrow V$ を直交射影とする。 $\text{span } \xi$ 上の半正定値 2 次形式 B を

$$B(u, v) = \langle P(u), P(v) \rangle \quad (u, v \in \text{span } \xi)$$

で定義する。 B を対角化する $\text{span } \xi$ の正規直交基底 e_1, \dots, e_p をとり $\lambda_1, \dots, \lambda_p$ を対応する B の固有値とする。 ξ は unit simple vector だから $\xi = \pm e_1 \wedge \cdots \wedge e_p$ となる。任意の $u \in \text{span } \xi$ について $0 \leq B(u, u) \leq |u|^2$ が成り立つので $0 \leq \lambda_j \leq 1$ が各 $j = 1, \dots, p$ について成り立つ。 e_j の順序を適当にかえて $1 \leq j \leq k$ のとき $0 < \lambda_j < 1$ で $\lambda_{k+1} = \cdots = \lambda_r = 1, \lambda_{r+1} = \cdots = \lambda_p = 0$ となるようにできる。 $1 \leq j \leq k$ に対して $\lambda_j = \cos^2 \theta_j$ となるように $0 < \theta_j < \pi/2$ を選んでおく。すると $1 \leq j \leq k$ に対して $|P(e_j)|^2 = B(e_j, e_j) = \lambda_j = \cos^2 \theta_j$ 。したがって一意的に単位ベクトル $f_j \in V, g_j \in V^\perp$ が存在して $e_j = \cos \theta_j f_j + \sin \theta_j g_j$ と表すことができる。 $i \neq j$ のとき $\langle P(e_i), P(e_j) \rangle = B(e_i, e_j) = 0$ だから $\langle f_i, f_j \rangle = 0$ となり f_1, \dots, f_k は V の正規直交ベクトルである。さらに

$$\langle g_i, g_j \rangle = \langle e_i - P(e_i), e_j - P(e_j) \rangle = \langle e_i, e_j \rangle - \langle P(e_i), P(e_j) \rangle = 0$$

だから g_1, \dots, g_k は V^\perp の正規直交ベクトルである。 $f_{k+1} = e_{k+1}, \dots, f_r = e_r, g_{k+1} = e_{r+1}, \dots, g_s = e_p$ とおくと f_1, \dots, f_r は V の正規直交ベクトルで、 g_1, \dots, g_s は V^\perp の正規直交ベクトルである。 $\xi = \pm e_1 \wedge \cdots \wedge e_p$ だから必要なら f_1 と g_1 を $-f_1$ と $-g_1$ に置き換えることにより補題の等式を満たす。

7.3 定義. $\phi \in \wedge^p E^*$ に対して部分ベクトル空間 $V^* \subset E^*$ が $\phi \in \wedge^p V^*$ を満たしているとき V^* が ϕ を展開しているという。

7.4 命題. $\phi \in \wedge^p E^*$ に対して

$$N(\phi) = \{v \in E \mid v \lrcorner \phi = 0\}$$

$$\text{span } \phi = \{\eta \lrcorner \phi \mid \eta \in \wedge^{p-1} E\}$$

とおくと

$$\begin{aligned} N(\phi) &= \{v \in E \mid \forall f \in \text{span } \phi \ f(v) = 0\} \\ \text{span } \phi &= \{f \in (E)^* \mid \forall v \in N(\phi) \ f(v) = 0\}. \end{aligned}$$

証明. $v \in E$ と $\eta \in \wedge^{p-1} E$ に対して

$$\langle \eta, v \rfloor \phi \rangle = \langle \eta \wedge v, \phi \rangle = (-1)^{p-1} \langle v \wedge \eta, \phi \rangle = (-1)^{p-1} \langle v, \eta \rfloor \phi \rangle$$

だから

$$\begin{aligned} v \in N(\phi) &\iff \forall \eta \in \wedge^{p-1} E \ \langle \eta, v \rfloor \phi \rangle = 0 \\ &\iff \forall \eta \in \wedge^{p-1} E \ \langle v, \eta \rfloor \phi \rangle = 0 \\ &\iff \forall f \in \text{span } \phi \ \langle v, f \rangle = 0. \end{aligned}$$

したがって

$$N(\phi) = \{v \in E \mid \forall f \in \text{span } \phi \ f(v) = 0\}.$$

これより

$$\text{span } \phi = \{f \in (E)^* \mid \forall v \in N(\phi) \ f(v) = 0\}.$$

7.5 命題. $\phi \in \wedge^p E^*$ に対して $\text{span } \phi$ は ϕ を展開している最小の部分ベクトル空間である。

証明. まず $\text{span } \phi$ が ϕ を展開していることを示す。 E の基底 e_1, \dots, e_n を e_1, \dots, e_k が $N(\phi)$ の基底になっているようにとると、上で示したことより

$$\text{span } \phi = \sum_{j=k+1}^n \mathbb{R} e_j^*.$$

ϕ を $\phi = \sum_I a_I e_I^*$ と表しておく。 $1 \leq i \leq k$ となっている i を 1 つ固定しておく。 $e_i \rfloor \phi = 0$ だから任意の $\eta \in \wedge^{p-1} E$ に対して

$$\begin{aligned} 0 &= \langle \eta, e_i \rfloor \phi \rangle = \sum_I a_I \langle \eta, e_i \rfloor e_I^* \rangle \\ &= (-1)^{p-i} \sum_{I \ni i} a_I \langle e_i \wedge \eta, e_I^* \rangle = (-1)^{p-i} \sum_{I \ni i} a_I \langle \eta, e_{I-\{i\}}^* \rangle. \end{aligned}$$

よって $i \in I$ ならば $a_I = 0$ となるので

$$\phi \in \wedge^p \left(\sum_{j=k+1}^n \mathbb{R} e_j^* \right) = \wedge^p \text{span } \phi.$$

次に $V^* \subset E^*$ が ϕ を展開していると仮定しよう。

$$N(V^*) = \{v \in E \mid \forall f \in V^* \ f(v) = 0\}$$

とおくと、 $\phi \in \wedge^p V^*$ より $N(V^*)$ の元 v に対して $v \rfloor \phi = 0$ となり $v \in N(\phi)$ が成り立つ。したがって $N(V^*) \subset N(\phi)$ で $\text{span } \phi \subset V^*$ 。以上で $\text{span } \phi$ は ϕ を展開している最小の部分ベクトル空間であることがわかった。

7.6 命題. $\phi \in \wedge^p E^*$ に対して $G(\phi) = \{\xi \in G(p, E) \mid \phi(\xi) = \|\phi\|^*\}$ とおくと $G(\phi) \subset \wedge^p(N(\phi)^\perp)$ が成り立つ。

証明. $\eta \in G(\phi)$ に対して $V = N(\phi)^\perp$ とおいて補題 7.2 を適用すると $N(\phi)^\perp$ の正規直交ベクトル f_1, \dots, f_r と $N(\phi)$ の正規直交ベクトル g_1, \dots, g_s と $0 < \theta_j < \pi/2$ ($j = 1, \dots, k$) が存在し (ただし $k \leq r, s \leq p, r + s - k = p$)

$$\eta = (\cos \theta_1 f_1 + \sin \theta_1 g_1) \wedge \cdots \wedge (\cos \theta_k f_k + \sin \theta_k g_k) \wedge f_{k+1} \wedge \cdots \wedge f_r \wedge g_{k+1} \wedge \cdots \wedge g_s$$

を満たす。 $g_j \in N(\phi)$ だから $g_j \lrcorner \phi = 0$ 。 $\phi(\eta) = \|\phi\|^*$ よりまず $k = s$ 、したがって $r = p$ でなければならない。さらに

$$\phi(\eta) = \cos \theta_1 \cdots \cos \theta_k \phi(f_1 \wedge \cdots \wedge f_p)$$

だから $k = 0$ となって $\eta = f_1 \wedge \cdots \wedge f_p$ 。したがって $\eta \in \wedge^p(N(\phi)^\perp)$ 。

7.7 命題. $E = V \oplus W$ を直交直和分解とし、 $\phi \in \wedge^{p-q} V^*$ をとり $\psi \in \wedge^q W^*$ を *unit simple vector* とする。このとき $\phi \wedge \psi \in \wedge^p E^*$ は $\|\phi \wedge \psi\|^* = \|\phi\|^*$ を満たし、 $\eta \in \wedge^q W$ を ψ の *dual unit simple vector* とすると

$$G(\phi \wedge \psi) = \{\xi \wedge \eta \mid \xi \in G(\phi)\}$$

が成り立つ。

証明. $N(\psi) \subset N(\phi \wedge \psi)$ より $N(\phi \wedge \psi)^\perp \subset N(\psi)^\perp$ 。よって $G(\phi \wedge \psi)$ の元を特徴づけるためには命題 7.6 より $N(\psi)^\perp$ で考えれば十分。したがって $N(\psi) = \{0\}$ つまり $W^* = \text{span } \psi$ としてよい。 ψ は *simple vector* だから $\dim \text{span } \psi = q$ 。

V と任意の $\xi \in G(p, E)$ に対して補題 7.2 を適用すると V の正規直交ベクトル f_1, \dots, f_r と W の正規直交ベクトル g_1, \dots, g_s と $0 < \theta_j < \pi/2$ ($j = 1, \dots, k$) が存在し (ただし $k \leq r, s \leq p, r + s - k = p$)

$$\xi = (\cos \theta_1 f_1 + \sin \theta_1 g_1) \wedge \cdots \wedge (\cos \theta_k f_k + \sin \theta_k g_k) \wedge f_{k+1} \wedge \cdots \wedge f_r \wedge g_{k+1} \wedge \cdots \wedge g_s$$

を満たす。 $g_1, \dots, g_s \in W$ より $s \leq q$ 。 $s < q$ とすると $(\phi \wedge \psi)(\xi) = 0$ となる。 $s = q$ のときは $\psi(g_1 \wedge \cdots \wedge g_q) = \pm 1$ で、必要ならば f_i の符号もかえて $\psi(g_1 \wedge \cdots \wedge g_q) = 1$ とでき

$$\begin{aligned} (\phi \wedge \psi)(\xi) &= \pm \sin \theta_1 \cdots \sin \theta_k \phi(f_{k+1} \wedge \cdots \wedge f_r) \\ &\leq \sin \theta_1 \cdots \sin \theta_k \|\phi\|^* \leq \|\phi\|^*. \end{aligned}$$

よって $\|\phi \wedge \psi\|^* \leq \|\phi\|^*$ となる。さらに上の不等式で等号が成立するためには少なくとも $k = 0$ でなければならない。このとき $\xi = f_1 \wedge \cdots \wedge f_{p-q} \wedge g_1 \wedge \cdots \wedge g_q$ となり、 $(\phi \wedge \psi)(\xi) = \|\phi\|^*$ となるための必要十分条件は $f_1 \wedge \cdots \wedge f_{p-q} \in G(\phi)$ である。よってこのような元は存在し命題が証明された。

7.8 命題. e_1, \dots, e_n を E の正規直交基底とし $2p \leq n$ としておく。

$$\phi = \lambda e_1^* \wedge \cdots \wedge e_p^* + \mu e_{p+1}^* \wedge \cdots \wedge e_{2p}^* \in \wedge^p E^*$$

とおくと $p \geq 2$ のとき $\|\phi\|^* = \max\{|\lambda|, |\mu|\}$ が成り立つ。

7.9 注意. $p = 1$ のときは $\lambda e_1^* + \mu e_2^* = (\lambda e_1 + \mu e_2)^*$ となり、この comass は $\sqrt{\lambda^2 + \mu^2}$ である。

証明. $N(\phi)^\perp = \text{span}\{e_1, \dots, e_{2p}\}$ となるので命題 7.6 より $n = 2p$ としても一般性は失われない。 $V = \text{span}\{e_1, \dots, e_p\}$ において $\xi \in G(p, E)$ と V に補題 7.2 を適用すると V の正規直交ベクトル f_1, \dots, f_r と V^\perp の正規直交ベクトル g_1, \dots, g_s と $0 < \theta_j < \pi/2$ ($j = 1, \dots, k$) が存在し (ただし $k \leq r, s \leq p, r + s - k = p$)

$\xi = (\cos \theta_1 f_1 + \sin \theta_1 g_1) \wedge \dots \wedge (\cos \theta_k f_k + \sin \theta_k g_k) \wedge f_{k+1} \wedge \dots \wedge f_r \wedge g_{k+1} \wedge \dots \wedge g_s$ を満たす。 $\dim V = \dim V^\perp = p$ だから $r, s \leq p$ 。さらに $r, s < p$ のときは $\phi(\xi) = 0$ となる。 $r = p, s < p$ のときは

$$\xi = (\cos \theta_1 f_1 + \sin \theta_1 g_1) \wedge \dots \wedge (\cos \theta_k f_k + \sin \theta_k g_k) \wedge f_{k+1} \wedge \dots \wedge f_p$$

となるので

$$\phi(\xi) = \pm \lambda \cos \theta_1 \cdots \cos \theta_k \leq |\lambda|.$$

$s = p, r < p$ のときも同様にして $\phi(\xi) \leq |\mu|$ となる。そこで $r = s = p$ の場合を考えよう。このときは $k = p$ となり

$$\begin{aligned} \phi(\xi) &= \pm \lambda \cos \theta_1 \cdots \cos \theta_p \pm \mu \sin \theta_1 \cdots \sin \theta_p \\ &\leq [\cos^2 \theta_1 + \sin^2 \theta_1]^{1/2} [\lambda^2 \cos^2 \theta_2 \cdots \cos^2 \theta_p + \mu^2 \sin^2 \theta_2 \cdots \sin^2 \theta_p]^{1/2} \\ &= [\lambda^2 \cos^2 \theta_2 \cdots \cos^2 \theta_p + \mu^2 \sin^2 \theta_2 \cdots \sin^2 \theta_p]^{1/2} \\ &\leq |\lambda \cos \theta_2 \cdots \cos \theta_p| + |\mu \sin \theta_2 \cdots \sin \theta_p|. \end{aligned}$$

以下同じ操作を繰り返すことにより $\phi(\xi) \leq \max\{|\lambda|, |\mu|\}$ を得る。したがって $\|\phi\|^* \leq \max\{|\lambda|, |\mu|\}$ である。さらに $\xi = e_1 \wedge \dots \wedge e_p$ または $\xi = e_{p+1} \wedge \dots \wedge e_{2p}$ とすると $\phi(\xi) = \max\{|\lambda|, |\mu|\}$ が成り立ち $\|\phi\|^* = \max\{|\lambda|, |\mu|\}$ である。

7.10 補題. e_1, \dots, e_n を E の正規直交基底とし、双対基底を e_1^*, \dots, e_n^* で表す。 $I = \{i_1, \dots, i_p\}$ ($i_1 < \dots < i_p$) に対して $e_I^* = e_{i_1}^* \wedge \dots \wedge e_{i_p}^*$ とおく。 $\text{card}(I \cap J) \leq p - 2$ のとき

$$\|\lambda e_I^* + \mu e_J^*\|^* = \max\{|\lambda|, |\mu|\}$$

が成り立つ。

証明. $\text{card}(I \cap J) \leq p - 2$ だから

$$\begin{aligned} e_I^* &= e_1^* \wedge \dots \wedge e_p^*, \\ e_J^* &= e_1^* \wedge \dots \wedge e_{p-l}^* \wedge e_{p+1}^* \wedge \dots \wedge e_{p+l}^* \quad (l \geq 2) \end{aligned}$$

としてよい。

$$\lambda e_I^* + \mu e_J^* = e_1^* \wedge \dots \wedge e_{p-l}^* \wedge (\lambda e_{p-l+1}^* \wedge \dots \wedge e_p^* + \mu e_{p+1}^* \wedge \dots \wedge e_{p+l}^*)$$

となり、 $l \geq 2$ だから命題 7.8 より

$$\|\lambda e_{p-l+1}^* \wedge \dots \wedge e_p^* + \mu e_{p+1}^* \wedge \dots \wedge e_{p+l}^*\|^* = \max\{|\lambda|, |\mu|\}$$

が成り立つ。したがって命題 7.7 より

$$\|\lambda e_I^* + \mu e_J^*\|^* = \max\{|\lambda|, |\mu|\}.$$

7.11 系. $i_{p-1} \leq p$ のとき $b_I = 0$ とすると

$$\left\| e_1^* \wedge \cdots \wedge e_p^* + \sum_I b_I e_I^* \right\|^* \leq \max \left\{ 1, \sum_I |b_I| \right\}$$

が成り立つ。

証明. $B = \sum_I |b_I|$, $\epsilon_I = \text{sign } b_I$, $\phi = e_1^* \wedge \cdots \wedge e_p^*$ とおく。

$$\left\| \phi + \sum_I b_I e_I^* \right\|^* = \left\| \sum_I |b_I| \left(\frac{1}{B} \phi + \epsilon_I e_I^* \right) \right\|^* \leq \sum_I |b_I| \left\| \frac{1}{B} \phi + \epsilon_I e_I^* \right\|^*.$$

仮定より $b_I \neq 0$ ならば $\text{card}(\{1, \dots, p\} \cap I) \leq p-2$ となるので補題 7.10 より

$$\left\| \frac{1}{B} \phi + \epsilon_I e_I^* \right\|^* = \max \left\{ \frac{1}{B}, 1 \right\}.$$

したがって

$$\left\| \phi + \sum_I b_I e_I^* \right\|^* \leq \sum_I |b_I| \max \left\{ \frac{1}{B}, 1 \right\} = \max\{1, B\}.$$

7.12 補題. $\xi \in \wedge^p E$ を *simple vector* とし $V = \text{span } \xi$ とおく。 $\phi \in \wedge^p E^*$ が $\phi(\xi) = 1$ を満たすとする。このとき次の条件を満たす V の補空間 W が一意的に存在する。 $\xi = v_1 \wedge \cdots \wedge v_p$ で v_{p+1}, \dots, v_n が W の基底になるような E の任意の基底 v_1, \dots, v_n に対して $i_{p-1} \leq p$ ならば $a_I = 0$ となるような $\{a_I\}$ を使って ϕ を

$$\phi = v_1^* \wedge \cdots \wedge v_p^* + \sum_I a_I v_I^*$$

と表すことができる。

証明. $\eta \in \wedge^{p-1} V$, $v \in E$ に対して $\lambda(\eta)(v) = \phi(\eta \wedge v)$ とおくことによって線形写像

$$\lambda : \wedge^{p-1} V \longrightarrow E^*$$

を定義する。 $\xi = v_1 \wedge \cdots \wedge v_p$ となる $v_1, \dots, v_p \in V$ をとって $1 \leq i \leq p$ について $\eta_i = (-1)^{p-i} v_1 \wedge \cdots \wedge \hat{v}_i \wedge \cdots \wedge v_p$ とおく。すると $\{\eta_i\}$ は $\wedge^{p-1} V$ の基底になる。 $\lambda_i = \lambda(\eta_i) \in E^*$ とおく。

$$\begin{aligned} \lambda_i(v_j) &= (-1)^{p-i} \phi(v_1 \wedge \cdots \wedge \hat{v}_i \wedge \cdots \wedge v_p \wedge v_j) \\ &= \delta_{ij} \phi(v_1 \wedge \cdots \wedge v_p) = \delta_{ij} \end{aligned}$$

となるので $(\lambda_1 \wedge \cdots \wedge \lambda_p)(\xi) = 1$ 。したがって $\lambda_1, \dots, \lambda_p$ は 1 次独立になる。そこで $W = \bigcap_{i=1}^p \ker(\lambda_i)$ とおくと $V \cap W = \{0\}$ であり、 $\dim V + \dim W = n$ だから $E = V \oplus W$ 。 v_{p+1}, \dots, v_n を W の基底とすると $1 \leq i \leq p$ と $p+1 \leq j \leq n$ に対して $v_j \in W$ だから

$$\phi(v_1 \wedge \cdots \wedge \hat{v}_i \wedge \cdots \wedge v_p \wedge v_j) = (-1)^{p-i} \lambda_i(v_j) = 0.$$

したがって

$$\phi = v_1^* \wedge \cdots \wedge v_p^* + \sum_I a_I v_I^*$$

と表すと $i_{p-1} \leq p$ ならば $a_I = 0$ となる。 W の一意性は上の W の定め方よりわかる。

7.13 補題. $\phi, V = \text{span } \xi, W$ を補題 7.12 のようにとる. E の内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ を $V \perp W$ と $\|\xi\| = 1$ を満たすようにとる.

$$C^2 \geq \binom{n}{p} \|\phi\|^*$$

を満たす定数 C に対して $E = V \oplus W$ 上の内積を

$$\langle \cdot, \cdot \rangle_1 = \langle \cdot, \cdot \rangle_V + C^2 \langle \cdot, \cdot \rangle_W$$

によって定めるとこの内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle_1$ に関して

$$\|\phi\|_1^* = 1 \quad \text{and} \quad \phi(\xi) = \|\xi\| = 1$$

が成り立つ。

証明. $\|\xi\| = 1$ だから E の正規直交基底 $\{\epsilon_1, \dots, \epsilon_n\}$ を $\xi = \epsilon_1 \wedge \dots \wedge \epsilon_p$ となるようにとることができる. 補題 7.12 より $i_{p-1} \leq p$ ならば $a_I = 0$ となるような $\{a_I\}$ を使って ϕ を

$$\phi = \epsilon_1^* \wedge \dots \wedge \epsilon_p^* + \sum_I a_I \epsilon_I^*$$

と表すことができる. $|a_I| = |\phi(\epsilon_I)| \leq \|\phi\|^*$ に注意しておく。

$$e_j = \begin{cases} \epsilon_j, & j = 1, \dots, p \\ \frac{1}{C} \epsilon_j, & j = p+1, \dots, n \end{cases}$$

とおくと $\{e_j\}$ は新しい内積 $\langle \cdot, \cdot \rangle_1$ に関する正規直交基底になる. $1 \leq j \leq p$ ならば $e_j^* = \epsilon_j^*$ で $p+1 \leq j \leq n$ ならば $e_j^* = C \epsilon_j^*$ だから

$$\phi = e_1^* \wedge \dots \wedge e_p^* + \sum_I b_I e_I^*$$

と表すと、 $i_{p-1} \leq p$ ならば $b_I = 0$ となる. また $\phi(\xi) = 1, \|\xi\| = 1$ より $\|\phi\|^* \geq 1$. したがって $C \geq 1$ だから $|b_I| \leq (1/C^2)|a_I|$. 系 7.11 より

$$\|\phi\|_1^* \leq \max \left\{ 1, \sum_I |b_I| \right\} \leq \max \left\{ 1, \frac{1}{C^2} \sum_I |a_I| \right\}.$$

ここで $|a_I| \leq \|\phi\|^*$ だから

$$\frac{1}{C^2} \sum_I |a_I| \leq \frac{1}{C^2} \binom{n}{p} \|\phi\|^* \leq 1$$

となり $\|\phi\|_1^* \leq 1$. 他方 $\phi(\xi) = 1$ だから $\|\phi\|_1^* = 1$.

命題 7.1 の証明. $f = \phi(\vec{\mathcal{F}}) \in \mathcal{E}^0(X)$ とおくと $f > 0$ だから X の Riemann 計量に $f^{2/p}$ をかけることができ、この Riemann 計量に関して $f^{-1}\vec{\mathcal{F}}$ が \mathcal{F} に接する unit simple vector field になる. $\phi(f^{-1}\vec{\mathcal{F}}) = 1$ となるので Riemann 計量をとりかえることにより

$\phi(\vec{\mathcal{F}}) = 1$ とできる。各 $x \in X$ において $\vec{\mathcal{F}}_x, \phi_x$ に補題 7.12 を適用し $W_x \subset T_x X$ を定める。 W_x が決める plane field を ν とする。 X 上の局所的な C^∞ 級ベクトル場 v_1, \dots, v_p を $\vec{\mathcal{F}} = v_1 \wedge \dots \wedge v_p$ を満たすようにとる。補題 7.12 で構成した λ_i は X 上の局所的な C^∞ 級 1 次微分形式になり、 $\nu = \bigcap_{i=1}^p \ker(\lambda_i)$ となる。各 λ_i を TX 上の関数とみなすと C^∞ 級になり $d\lambda_i$ は 1 次独立になる。したがって陰関数定理より ν は C^∞ 級 plane field になる。 \mathcal{F} が決める plane field を τ とすると $TX = \tau \oplus \nu$ となっている。

各 O_i 上で $\tau \perp \nu$ と $\|\vec{\mathcal{F}}\| = 1$ を満たすように取り直した Riemann 計量を g_i で表し 1 の分割 $\{h_i\}$ を $\text{spt } h_i \subset U_i$ となるようにとり、 $g' = \sum_i h_i g_i$ とおく。すると g' に関して X 全体で $\tau \perp \nu$ と $\|\vec{\mathcal{F}}\| = 1$ が成り立つ。

$$\binom{n}{p} \|\phi_x\|^* \leq C(x)^2 \quad (x \in X)$$

を満たす X 上の C^∞ 級関数 C をとり $g = g'_\tau + C^2 g_\nu$ とおくと補題 7.13 よりこの Riemann 計量 g に関して X 全体で

$$\|\phi\|^* = 1 \quad \text{and} \quad \phi(\vec{\mathcal{F}}) = \|\vec{\mathcal{F}}\| = 1$$

が成り立つ。したがって ϕ は g に関して \mathcal{F} の calibration になる。

参考文献

R. Harvey and H. B. Lawson Jr., *Calibrated geometries*, Acta Math. **148** (1982), 47-157.